

最優秀賞

葬儀で感じたこと

山口県 周南市立翔北中学校二年 魚谷 あかね

「ひいばあちゃん、遅くなってごめんね。今、帰ってきたよ。」

そう言って、私は冷たくなった曾祖母の頬を撫でた。訃報を受けたのは、およそ七時間前。それは旅行先のことだった。帰りの車内で、私は編み物が好きだった曾祖母の姿を思い出していた。毛糸のように暖かくて優しい人だった。

「これ何？」

曾祖母の枕元に盛られた白い団子を見て、私が聞いた。

「今から長い旅に出るばあちゃんのお弁当。」

米の粉で作るの。」

翌朝、隣家のばあちゃんが、同じ団子を作って供え替えた。この団子は、身内の者では作れないものだから、彼女が作ってくれたのだという。

曾祖母は、私たちと同居していたが、病気になる、五年間の入院生活を余儀無くされ、とうとう最期を病院のベッドで迎えた。家族は交代で見舞い、話をしたり、食事の介助をした。亡くなる一ヶ月ほど前から、

「家に連れて帰ってくれ。」

と、頼むように言っていた。しかし、曾祖母の体調、体力、家庭の事情など、様々な要件があり、叶えてやることはできなかった。

曾祖母の亡きがらを前に、家族の思いはひとつだった。通夜も葬儀も自宅で行いたい。一時でも長く、自宅に置いてあげたい。

私の家は田舎にあり、町と比べると、近

所とのつきあいも密と言えるだろう。それでも、昔のように自宅で葬儀をするのは珍しい。近所の方の協力なくしては難しい。そこで隣家のばあちゃんに相談してみることにした。

「それがいい。私等にまかせて。」

彼女はすぐに返事してくれた。

「ばあちゃんには、子供の頃から世話になったから。」

「ばあちゃんは人が良かったから、いつでも、母ちゃんみたいに甘えてきた。最後ぐらい何かさせてほしい。」

集まってくれた人は、口々にそう言った。

蒸し暑さの中で、葬儀は無事に終わった。

手伝いの人はみな、汗でぐっしょり濡れていた。

「みなさんのお陰で、母を家から送り出すことができました。」

と祖父が言った。

田舎の人は温かい。人間味がある。都会化した現代の人が忘れかけている「お陰様」とか「お互い様」という思いやりを教えてくれる。でもその恩恵を受ける為には、どう生きてきたかが強く問われることを知った。曾祖母は、誰にも親切にし、誰からも慕われていたにちがいない。私も曾祖母にならって、恩恵を受けられる生き方をしたいと思った。